



南武線の混雑緩和に向けた オフピーク通勤の実験的取組の結果について

1 オフピーク通勤の実験的取組の概要

実施概要 JR南武線最混雑区間(武蔵中原→武蔵小杉)利用職員を対象に、時差勤務の試行によるオフピーク通勤を実施。

実施期間 平成29年11月16日(木)～同月30日(木)(平日10日間)

2 参加状況

対象者数 1,556人

参加者数 1,240人

延べ人数 6,946人(1日あたり平均参加人数 約690人)

日別参加人数

16日(木)	17日(金)	20日(月)	21日(火)	22日(水)
640人	672人	747人	708人	724人
24日(金)	27日(月)	28日(火)	29日(水)	30日(木)
643人	723人	702人	764人	623人

時差勤務パターンの選択割合

①7時30分～16時15分 55.2%

②9時30分～18時15分 44.8%

3 南武線最混雑区間利用者アンケートの結果(1,344人から回答)

(1) 普段の通勤時間帯

- ・既にピーク時間帯(7時30分～8時30分)より前に出勤している職員 26.8%
→本取組によりピークをずらした職員は約73%

(2) オフピーク通勤期間中の電車内混雑の実感

- ・①7時30分勤務 約57%が“いつもより空いている、やや空いている”と実感。
また、約35%が“いつもと同じ”と実感。
- ・②9時30分勤務 約82%が“いつもより空いている、やや空いている”と実感。
- ・8時30分勤務 約85%が“いつもと同じ”と実感。

(3) オフピーク通勤の今後の実施について

- ・約80%が“今後も活用していきたい”と回答。
- ・そのうち“ときどき活用していきたい”が約34%で最も大きな割合を占めている。

(4) オフピーク通勤を実施しなかった、できなかった日の理由

- ・約65%が“業務の関係のため”実施できなかったと回答。

(5) 南武線の混雑緩和に関する自由意見

- ・「輸送力増強についての意見」や「混雑についての感想」が多くあった。

4 オフピーク通勤対象職場所属長アンケート（317部署から回答）

（1）所属内での調整等における課題について

- ・約30%の職場で、業務への影響を心配する意見があった。

（2）対象職員以外のオフピーク通勤に関する意見・要望について

- ・約40%の職場で、対象者の拡大を求める意見があった。

5 その他のオフピーク通勤に関わる取組

- ・多摩区役所及び麻生区役所におけるサテライトオフィスの試行設置。
- ・中原区役所独自の取組として、武蔵中原駅から区役所まで徒歩通勤等による混雑緩和の取組を実施。

※期間は、いずれの取組も平成29年11月16日～同月30日です。

6 実験的取組による効果

- ・本取組によりピークをずらした人数（実質的なオフピーク人数）は、1日あたり平均 約500人（＝約690人×約73%）
→計算上の効果 混雑率約2%低減（188%→186%）
- ・オフピーク通勤で時間をずらした電車内の混雑は、一定程度空いていることを実感した職員が半数以上おり、とりわけ、②の時間帯は多くの職員が実感している。

7 実験的取組から分かった課題および対応の方向性

- ・計算上は混雑率が約2%低減したが、“いつもと同じ”という意見が多かったことから、ピーク時間帯の混雑緩和を実感するためには、民間企業なども含めてより多くの参加が必要である。
- ・ピーク時間前の混雑が“いつもと同じ”という意見やオフピーク通勤の活用について“ときどき活用していきたい”という意見が多くあったことから、今後、オフピーク通勤の取組を拡大して進めるためには、オフピーク通勤の魅力を高める取組が必要である。
- ・オフピーク通勤の活用意向は高いが、“業務の関係のため実施できなかった”という回答が多いことや、業務への影響を心配する意見もあったことから、今後多く実施してもらうためには、多様な働き方を認める風土醸成やそれを踏まえた制度の検討が必要である。

8 今後の展開

（1）市の働き方・仕事の進め方改革と連携した取組推進

- ・市内では各路線で混雑している状況であることから、他の路線への拡大に向けた取組を推進。
- ・オフピーク通勤関連制度（時差勤務、サテライトオフィス等）の検討・推進。

（2）オフピーク通勤の魅力を高める取組の推進

- ・ゆう活との連携など、オフピーク通勤の魅力を高める取組を検討・調整。

（3）他都市とも連携しながら、民間企業等を含めたオフピーク通勤の機運向上

- ・第2回の実験的取組に向けて、市内の企業や都内の企業等にも普及啓発を図る。
- ・首都圏の各自治体との連携により、オフピーク通勤の機運を高める。